「詞葉新雅」における里言と雅言

建部一男

(一)、資料

十八世紀から十九世紀にかけて、倭訓栞（一七七一―一八八三）・雅言集覧（一七五三―一八三〇）・俚言集覧（一七五九―一八三九）などの規模の大きい国語辞典が出た。これらの辞典は、すべて理解のためのものである。これらに対して、本稿でとり上げた「詞葉新雅」は表現のための辞典である。(注1)

本書は、寛政四年（一七九二）、京都で、富士谷成寿（ふじたになりのぶ）論定・門人西村惟俊・藤木正名・筆授として刊行された百五十丁、所載の口語（里言と称する）見出し三千百十四語をもつ小辞典である。この書の表紙裏の解説によると、

此書は和歌和文連歌俳諧等に趣向はたちながら詞（ことば）心（こころ）のまゝにいひかねたる時その俗語の頭字につきて部分の下を求むへし和歌和文の詞（ことば）を委しく考てあてたり

とあつて、和歌和文などの創作にあたつて心中に浮んだ心の微妙な「ゆれうごき」を言語に表現しようという時の参考に用いさせようとしたものであろう。

本書の体裁は次の通りである。

ニホヒグルメ　香ごめに	ニツカハシウ　うきなし
ニホフ　かほる	ナイ
ニタ〳〵トワ　○ほゝゑむ	ニゲジタクナ　○にげめをつ
ラウ　かたゑむ	目ツキ　かふ
ニクゾウカナ　つみなきさま	ニッコリトワ　同上
イ　にくからず	ラウ
ニョロダカイ　○そびやぎた	ニラミアフテ　かほくらべす
ニッ。ポンビイ　る	キル　る
キ　○やまとだま	ニウワ柔和　○なだらかに
ニガ〳〵シイ　しゐ	ニッ。ポンウマ　○同上
ニクナイヤウ　あぢきなし	レツキ
スジヤ　○けにくから	ニノ足フム　たゆたふ
	ニクテラシイ　○けにくし

（九ウ）（注2）

印刷の都合上、字体、記号は改めたが、本書九丁裏をそのまま転写した。一ページにあたる部分が二段に区切られ、各段の上半にカタカナで、いわゆる趣向（こころ）を、下半には、それに対応する詞（ことば）を記す方法をとつている。

排列順は、カタカナの部分（以下、趣向、または里言という）の

首字はイロハ順にしたものの、第二字以下の順序や音節数についてはかなり自由な、無秩序なならべ方である。右の例でいうと、

152　ニホフ　かほる（上の算用数字は筆者のつけた本書見出し語の通し番号。以下これに準ずる）

162　ニガ〳〵シイ　あぢきなし

のように、一単語に一単語を対応させて表記したもの、

150　ニホヒグルメニ　香ごめに

のような複合語、

164　ニクウナイヤウスジャ　けにくからず

のように一単語の概念を文であらわしたもの等がある。

この表記上の不統一が、辞典としての形態をよわめながら、かえつて当時の生きた言語生活の実態、さらにそれを引き起こす著者の心的内容を示す例となる性格をもつ。それに対して、下半の「ひらかな」の部分（以下、詞、または雅言という）は、大体は統一されている。(注3)

(二)、作業目標と作業手続き

(1)

1　イヒ出ス　ことにいづる いひいづる

の場合、雅言は、はじめの「ことにいづる」を主に整理の対象とする。雅言を中心にしたのは、整理の第一段階では、里言はその表記が、形の上で複雑であることや、用言の活用が、雅言では、終止形と連体形が語形を異にしているため区別に便であること等を理由とする。（特に形容詞や形容動詞において）

(2)

里言も雅言も、整理の段階では「詞」を中心とし、それぞれ、その所属する品詞の型によつて決定する。単語としての限界を最大限に拡張し、複合語は一語に認定する。いわゆる「辞」は問題としない。ただし、「る・らる・す・さす・しむ」は詞の中に入れる。

53・ニゲジタクナ目ツキ　（傍線筆者。以下同）

などは名詞型に、

54・ニタ〳〵トワラウ

などは動詞型に、

53の雅言　にげめをつかふ

などは動詞型に、

64の雅言　けにくからず

などは形容詞型にする。

このようにして、里言も雅言も、所載の語を名詞型・動詞型・形容詞型・形容動詞型・その他の型・の五分類のいずれかにいれる。

467・トイフテソンナラ　さりとて

のような句や文、また、感動詞、副詞の類は「その他の型」に入れるが、それ以下の下位分類はほどこさない。

(3)

用言は、その活用形を決定する。用言の使用され方（文中での文法的役割）を推定するためである。近世は、すでに動詞、形容詞において、終止形と連体形が同形になりつつあり、そのいずれかがはつきりしない。その時は、対応する雅言の活用形をを見て区別の参

考とする。

2532・メニアマル　○めざましき

等の時、里言は動詞型の連体形とする。

(4)　名詞型は、ほとんど体言であるが、次のようなものもこの中にいれる。

511・チウハンナ物シリ　おれもの

2551・ミヅノ中ニアッテ　みこもりに

右の場合、511は雅言も里言も名詞型に、2551の場合は雅言は名詞型だが、里言はアッテによつて動詞型、（連用形）とする。

また、名詞型の語をゼロ（0）型、連用型、連体型に三分類する。右の511は雅言も里言もゼロ型、2551の雅言は連用型とする。

2877　ヒカゲノ　○かげかげしき身

の場合、里言は連体型、雅言はゼロ型とする。

本稿では、右にあげたような手続きをふみながら、「詞葉新雅」における里言と雅言との対応を二三の点について調査し、本書のいわゆる趣向と詞の対応の状態を概観する。また「趣向」については、その形容詞的表現を（雅言を中心として）基にして、心的内容と言語の形態との関連について若干考えてみたいと思う。

(三)、里言と雅言との概観

(1)・本書のいう「趣向」とはなにか・「詞」とはなにか。

いま、言語生活を言語の機能の三分類に対応して（「国語学原論・続編」時枝誠記著）実用的言語生活・社会的言語生活・鑑賞的言語生活に分類する。(一)、資料の項であげた、本書の解説文によると、本書でいう里言とは、素朴な、ナマのわかりやすい語をさし、雅言とは、鑑賞にたえうるように浄化された表現の語をさすであろう。つまり、里言は、その当時の日常生活の実用面に適応するように概念化され定着した言語であり、（「新雅」の「新」にあたる）雅言は、その当時の鑑賞的生活の創作面に適応するように概念化され、定着した言語（「新雅」の「雅」にあたる）であるといえよう。両者の共通点は、同一の心的内容を概念化する過程にあることであり、相違点は、前者が実用的言語生活に定着したのに対して、後者は鑑賞的言語生活に定着しているということである。

(2)・里言と雅言との概観

ここでは、(二)の手続きで示したような分類を仮りにほどこしてみて、品詞型からどのような傾向があるかを見ようと思う。

表Ⅰ（注4）では、里言も雅言も動詞型に統叙されたものがもつとも多く、両者とも四〇％をこえる。名詞型は、(二)の手続きで記したように、相当範囲を拡げたが動詞型より少なく両者とも二〇％をこえるにすぎない。

(3)・里言と雅言との対応

統叙の型についての分類

次に、里言の見出し語の五分類されたものが、どんな分類の雅言で対応されいいかえられているかをみる。次の表でみると、たとえば里言の動詞型が一四〇九（左端の計）語あるが、それらのうち一

表（Ⅰ）

		動詞型	名詞型	形容詞型	形容動詞型	その他の型	合計
里言	語数	1370	671	486	225	362	3114
	里言総数に対する%	43.9	21.5	15.6	7.0	11.6	100
雅言	語数	1409	753	384	173	395	3114
	雅言総数に対する%	45.2	24.1	12.3	12.6	5.5	100

一五三は雅言の動詞型で対応し、六六は雅言の名詞型で、一一五は形容詞型で、二九は形容動詞型で、四六はその他の型で対応するという風に、あらゆる品詞の型で里言に対応している。

右の対応のしかたの実例を一つずつあげる。全部で二五例、表Ⅱの右上より下へ、次に名詞型対動詞型から下へという順序で記す。

表（Ⅱ）

里言＼雅言	動詞型	名詞型	形容詞型	形容動詞型	その他の型	雅言計
動詞型	1153	66	115	29	46	1409
名詞型	65	550	39	41	58	753
形容詞型	67	26	219	52	20	384
形容動詞型	31	7	82	48	5	173
その他の型	54	22	31	55	233	395
里言計	1370	671	486	225	362	3114

(1)・里言動詞型→雅言動詞型
501・チョイトミル・ひとめみる

(2)・里言動詞型→雅言名詞型
740・カクシテハナシスル・みそかごと

(3)・里言動詞型→雅言形容詞型
2340・キエイルヤウニ思フ・心ぼそく

(4)・里言動詞型→雅言形容動詞型
1509・ウツキリトシタ・きよらに

(5)・里言動詞型→雅言その他の型
646・オモヒマワセバ・あはれ
(6)・里言名詞型→雅言動詞型
552・オンナジトコロ・所もかへず
(7)・里言名詞型→雅言名詞型
2379・キョウヨムコエ・どきやうの声
(8)・里言名詞型→雅言形容詞型
1514・ウツケタヤウニ・しれじれしく
(9)・里言名詞型→雅言形容動詞型
3042・スデヾ空手・たゞに
(10)・里言名詞型→雅言その他の型
2859・ヒトカタマリヅツ・むらむら
(11)・里言形容詞型→雅言動詞型
1426・ムネガセツナイ・むねはしる
(12)・里言形容詞型→雅言名詞型
1133・ソコキミガワルイ・心のおに
(13)・里言形容詞型→雅言形容詞型
2460・キナガウ・心ながく
(14)・里言形容詞型→雅言形容動詞型
623・オトナシウ・おいらかに
(15)・里言形容詞型→雅言その他の型
1384・ナカノヨイ・水もるまじきなり
(16)・里言形容動詞型→雅言動詞型
738・カラダフサウヲウナ・身におはぬ
(17)・里言形容動詞型→雅言名詞型
2878・ヒゲダクサンナ・かづらひげ
(18)・里言形容動詞型→雅言形容詞型
1721・マッスグニ・なほく
(19)・里言形容動詞型→雅言形容動詞型
243・ハンチヤナ・なかなかなる
(20)・里言形容動詞型→雅言その他の型
2808・シリガルニ・すがすがと
(21)・里言その他の型→雅言動詞型
1453・ウボウボト・あくがるる
(22)・里言その他の型→雅言名詞型
412・トツ。ヽオイツ・たちゐ
(23)・里言その他の型→雅言形容詞型
913・ヨイハサテ・よしや
(24)・里言その他の型→雅言形容動詞型
2787・シツ。ポリト・しめやかに
(25)・里言その他の型→雅言その他の型
1137・ソウトモソウトモ・さかし

表(Ⅱ)であきらかなように、五種の里言の一つ一つに対し、五種の型をとつて雅言で対応しているのであつて、二五の各欄に欠けるところがない。同型同志の対応(実例の(1)(7)(13)(25))が数の上では多く、形容動詞型同志の対応がこの傾向をはなれている。

次に、(Ⅱ)におけるそれぞれの型の百分比を雅言中心、里言中心に

表(Ⅱ′)表(Ⅱ″)であらわす。

(Ⅱ′)・(Ⅱ″)を比較すると次の特色を知る。

ⓐ・(Ⅱ′)では同型同志の対応が高率を示し、△が表の右上方から左下方へ対角線に沿つたように並ぶ。

ⓑ・(Ⅱ″)では、形容動詞型同志の対応が二位となり、形容動詞型の里言には形容詞型の雅言が対応する傾向がつよい。

ⓒ・(Ⅱ′)の△は(Ⅱ″)ではそれぞれの率が低くなり、その分だけが他の型に分散している。ただし、形容詞・形容動詞の両型は事情が異なり、形容詞型同志では里言の率が(Ⅱ′)より高い。

表(Ⅱ′)——表(Ⅰ)の下の計を百とする（雅言中心）

雅言＼里言	動詞型	名詞型	形容詞型	形容動詞型	その他の型
動詞型	△84.1	10.4	23.6	12.8	12.7
名詞型	4.7	△81.9	8.0	18.2	16.0
形容詞型	4.8	3.8	△45.0	23.1	5.5
形容動詞型	2.2	1.0	16.8	△21.3	1.3
その他の型	3.9	2.0	6.3	24.4	△64.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

△はもっとも率の高いもの

(4)里言と雅言との用言の分類活用形について

用言をその活用形によつて分類すると次の表Ⅲ、Ⅲ′の結果をみる。雅言の場合はその最高の率が、動詞型では終止形、形容詞型では連体形、形容動詞型では連用形にあらわれる。これは本書の著者が、本書の雅言の部に、従来からの歌の常識から、多くの例にもとづいて帰納した結果、規範性をもたそうとした一つのあらわれと思う。ただ実用生活における言語は、(Ⅲ′)にあるように、その規範性から遠ざかる傾向にあり、形容動詞型は連体形が多くなる。

表(Ⅱ″)——表(Ⅰ)の左端の計を百とする（里言中心）

雅言＼里言	動詞型	名詞型	形容詞型	形容動詞型	その他の型	計
動詞型	△81.1	4.9	8.1	20.5	3.2	100.0
名詞型	8.6	△73.0	5.1	5.4	7.7	100.0
形容詞型	17.0	6.7	△57.0	13.5	5.2	100.0
形容動詞型	17.9	4.0	△47.3	27.7	2.8	100.0
その他の型	13.6	3.5	7.8	13.9	△58.9	100.0

△はもっとも率の高いもの

(5)里言と雅言との名詞型の分類

本稿(二)の(4)で記したように、名詞を辞書に記載する上では常識であるゼロ型（体言の下に助詞、助動詞の全然つかぬもの）以外に、その下に、に・で・が・などの助詞をつけたもの（連用型とする）、また、その下に、の・をつけたもの（連体型とする）が見出しの里言にも、また対応する雅言にも含まれている。歌を作る場合を考え、いろいろな例をあげよう、なるべくすぐ役立つようにという著者のこころみであろう。（表Ⅳ）

表(Ⅲ)・雅言の用言の分類——活用形を中心に

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	計
動詞型	101	278	△716 (52.2)	251	11	13	1370
形容詞型	5	110	147	△224 (46.0)	0	0	486
形容動詞型	7	△162 (72.0)	4	52	0	0	225

△はその品詞型における最大の語数で(　)内はその百分比

表(Ⅲ')・里言の用言の分類—活用形を中心に

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	計
動詞型	125	272	△712 (50.5)	292	1	7	1409
形容詞型	2	97	140	△144 (37.5)	1	0	384
形容動詞型	0	65	1	△107 (61.8)	0	0	173

表(Ⅳ)名詞型の三分類—接続する辞について

	ゼロ型	連用形	連体型	計
里言	△533 (69.8)	180	50	763
雅言	△535 (79.7)	101	35	671

△は最大のもので( )内はそれぞれにおける百分比

(6)・里言と雅言との対応数のアンバランス

本書を辞典としてみる時、弱点として感じられるのは、里言・雅言両者とも、派生語、類語、反対語等に対する考慮が払われていないことである。里言は大体関係ある語は隣接して排列されているが、(それすらも相当不安定、無統制)雅言においてはその類語を求めようとすれば三千百十四の語をかたはしから探さなければならない。いま、雅言、里言のどちらかが、形容詞型の対応を示すものの中で、そのいずれかが語数にして他の四倍以上ある例のみを次に列挙する。(五十音順)

(A)里言少。雅言多

671 オクユカシミガナイ
あふなし・あさはかなる・あはつけし・あはくしき・あはつか

1566 グワンゼガナイ
いわけなし・いとけなし・いときなし・をさなし・きびはなる

1941 コワイ
おとろしき・むくむくしき・むくつけき・おどろおどろしき

2640 ジウニンナミ
よろしき・人なみ・なみなみ・なみ

504 チウハンナ
はしたなし・はした・なかなかなる・なかぞらなる・うきたる・おれたる

1721 マツスグニ。
なほし・すぐに・たゞに・すなほに

2972 モノナレヌ
うひうひしき・世をしらぬ・よづかぬ・よにへぬ

2461 ユツタリト。
のどけく・のどかに・ゆたけく・よだけく・ゆるるかに

(B)里言多・雅言少

あさまし
1747ケウガル・1748ケウノサメタ・2337キモノツブレタ・2430キモガツブレル

いまめかし
13インクツナ・73インキナ・1498ウツトシイ・2396キウクツナ

おほけなし
604オホギマヘニ・973タイキナ・1772フソウオウナ・2579ミブンニスギテ

かたはらいたし
800カホニ火ガタカレル・2446キエタイ・2695ジユツナウ思ウ・3015セウシニ思ウ

かしこし
621オソロシウ・628オソレオヽイ・1502ウツ。テツケタ・2151アリガタイ・2968モツタイナイ

かどかどし
530リクツクサイ・531リコウソウナ・1147ツカウドナ・2436キリヤウミエテ・2875ヒトキワタツテ

かやすし
159ロンナシニ・1419ムツカシイフモナウ・1892コヽロヤスウ・2702シヤンニモオヨバズ

こころながし
2032コンカギリ・2460キナガウ・2670シンボウヅヨウ・2761ジヤウコンニ

こよなし
221バツクンチガウ・411トビキリノ・841カクダンナ・1951コノウエモナウ

そぞろはし
415トビタツバカリ・1065ソワソワトシタ・1493ウチツカヌ・1494ウワウワトシタ

びんなし
579オシテカツテガワルイ・1210ツガウノワルイ・1558グメンノワルイ・1559グワイノワルイ・1809フグメンナ・1810フツガウナ・1811フグアイナ

よし
885ヨイ・913ヨイハサア・914ヨイワイノ・915ヨシヨシ・916ヨイハ・2331キニン貴人

わりなし

702 ワカチナシニ・1436 ムリナ7ジヤ・1437 ムリヤリニ・3058 スヂガタ

、ヌ・3060 スヂモナイ

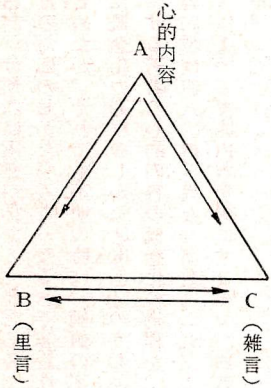
右の事情については、著者は「おほむね」（三ウ）で次のように記している。

古言一言を。こゝかしこに出し。里言ひとつに。古言をふたつみつもあてたるは。軽重なとありながら。義のかよへは也。

㈣、雅言の形容詞を中心とした趣向と詞

(1)雅言の形容詞に概念化された心的内容

いま、かりに日常生活の中のさまざまな心的内容をAとする。Aが本稿㈢の(1)（本書のいう「趣向」とはなにか。「詞」とはなにか。）でのべた如く里言に概念化されたものをB、雅言に概念化されたものをCとする。A・B・C三者の関係を三角形ABCで表わすと次のようになるであろう。



本書の著者が、B・Cを決定する時には、次のような概念化の過程が考えられる。

ⓐ・A→B

ⓑ・A→C

ⓒ・A→B→C

ⓓ・A→C→B

（もちろん、これは原則的な図式であり、実際は、A→B・B→C・A→C等の間で、いくたの選択・決定のための概念化の過程での往復や躊躇があったであろう。）

ここでは雅言の形容詞型を中心として心的内容の形容詞型にあらわれたものを分類しようとする。三角形ABCにおいて、BとCは同一の時の、同一の人による、同一の心的内容を概念化したものとして、対応させてある。異なる点は、Bは言語的に浄化されず、鑑賞的言語生活に適応するように概念化されなかつたことである。Cは鑑賞的言語生活に適応するように選択され、多くの例の中からすくい上げられつつ概念化されたものである。このような傾向は、すでに表(Ⅱ)・(Ⅱ′)・(Ⅲ)で見られるように、里言よりも安定し、一種の規範性をもつような数の排列と百分比の排列にもうかがえる。

形容詞型の語群は、心的内容Aの状態・価値・感覚・感情を表現するのに適当なグループである。（この四分類は、「国語学」40の高羽四郎氏の論文、「形容詞連用形の用法」―九五―一〇五ページによる。）本書では、各語が断片的に出ていて、一個の文学的作品に比

べると、相当、分類には困難が伴なう。雅言のみでは不明の時は、たえず里言の対応のしかたをみて、なるべく客観性から遠ざからぬようにつとめたが、それでも不明の時は、価値の部に入れる。

前記した概念化の過程のしかたⓐⓑⓒⓓのうちⓒの形式（A→C→B）における著者の心的内容の概念化の過程を、形容詞型の語（雅言形容詞型は四八〇例・異なり語数は二九三であるが、同一の語でも場合によって意味内容を異にするので、四八〇の全部を対象とする）を、

(1)・バシヨガセマイ・ところせし 70
・ナガウ・ながく 1294

等を「状態」に、

(2)・カワイラシイ・らうたき 831
・サワガシイ・らうがはしき 2315

等を「価値」に、

(3)・ダルイ・たゆし 942
・ムシヤウニサムイ・そぞろさむし 1420

等を「感覚」に、

(4)・ハヅカシイ・はづかし 165
・ハガユイ・もどかしき 175

等を「感情」に、

というように分類する。分類した上で、それぞれを活用形式の「ク活用」と「シク活用」とに二分類する。これは、形容詞型の意味内容と、活用形式すなわち形態との関連の有無を知るためである。このようにして次の表ができた。

(2)雅言の形容詞型の意味と活用形式との分類

表（V）

活用＼意味		状態	価値	感覚	感情	計
ク活用	語数	23	224	10	54	311
	百分比	7.3	72.0	3.2	17.3	100.0
シク活用	語数	1	127	8	39	175
	百分比	0.5	72.5	4.5	22.2	100.0
意味別計		24	351	18	93	486
百分比		4.0	72.4	3.9	19.9	100.0

「はづかし」という語だけを考えると、四分類に従えば明らかに「感情」であるが、実は、

141・イロジロナ・雪はづかしき

とあると、結局、「状態」に入れなければならない。これが右の表の「シク活用」の「状態」における唯一の例である。山本俊英氏の調査によれば（「国語学」23・「形容詞ク活用の意味上の相違について」一九五五年）、形容詞のク活用は「状態的な属性概念を表わす語」が大部分で、シク活用は「心的情意的な面を表わす語」が大部

分であるとし、日本書紀・古事記・続日本紀・宣命・万葉集・古今集・源氏物語の中から形容詞を精査した結果、上の傾向の例外は、奈良時代はク活用では十二％、シク活用では二十六％であるが、古今集では二十四％、二十一％、源氏物語では三十七％、四十七％という数がでている。本書の語例の出典は、平安時代を主としているが、(注5) いまひとつ筆者の調査が不足なので、右の表のみでは意味と形態との関連についての推定はむりである。ただ「状態」の項で、「ク活用」と「シク活用」が百分比において著しい差のあること、（七・三％と〇・五％）またその他の三項目が、率の上では、ほとんど両者平行していることに注目したい。近世の人の心的内容と、雅言と、里言との三者の関連は、形容詞型の語一つをとり上げてみても、単なる語数の計算からの推定をはるかに凌駕する多くの、種々な問題を含んでいると考える。

以上、「詞葉新雅」の内容を紹介しつつ、本書のいわゆる「趣向」と「詞」の対応の状態を概観した。これはあくまで概観であつて、以上の資料から、さらに、いろいろな問題が生まれてくることを願うものである。大方の御叱正を仰ぎたい。なお、本稿作成に当たつて終始、長田久男氏から数多くの御教示を得たことを併記して感謝の意を表する。

注1　「詞葉新雅」については、すでに一九五六年「文学」六月「言語と文学との一つの問題―文語の口語訳をめぐって」・一九五六年「福井大学紀要」第五号「詞葉新雅の意義」・一九五七年・十二月「福井大学紀要」第七号「国語史と国語学史」などに、福井大学佐藤茂教授の研究がある。今まで数回にわたって同教授から種々、御教示を得た。最近に出た「国語学史」の書では、田辺正男氏の著に、本書の紹介がある。（同書二七一ぺ）竹岡正夫氏の「富士谷成章全集下」には「おほむね」を書いた富士谷成胤についての説明がある。（同書八八八ぺ）また三木幸信氏の「義門の研究」に、義門の国語学研究の書の「類従雅俗言」についての説明があり、「詞葉新雅」にふれ、「この体裁と類従雅俗言が偶然一致したのかも知れないが、もし義門がこれを見ていたとしたら、これから義門が示唆を得たと考えても不当ではあるまい」とのべておられる（同書一一五七ぺ）

注2　雅言の〇印（実際にはへの印）について「おほむね」に次の説明がある。「歌によみつけぬ詞也。たたこれ古き例をしるさせたる也。字音なる詞をおきては。点ある詞とても。我ちからにてよまむは難なかるへし。」これについて（注1）の「文学」の「言語と文学との一つの問題―文語の口語訳をめぐって」の中に説明がある。（同書五六―五七ぺ）

注3　古言梯（楫取魚彦・一七六五年刊）・雅言童喩（河崎清厚・一八四四年刊）・心乃種（萩原広道・一八四八年刊）などに、語の排列をイロハ順と同時に一言・二言・三言と音節数の順も考慮に入れて行なっている。歌を作るには音節数が関係すると考えるが、その点、本書での態度は明らかにしていない。

注4　「統叙」という語は、渡辺実氏が「国語学」13・14でいわれたということを長田氏から指摘された。同書を読む機会がなくて渡辺氏のいわれる「統叙」なる語を理解もせずに使わせてい

ただいたが、これは筆者が、勝手に便宜上使用しているので、渡辺氏にはおわびしなければならない。

注5　本書の雅言の参考となった出典については、「おほむね」（ニウ――三オ）に、

「詞は。万葉集。古今。後撰。拾遺をもとゝし。後々の集の詞をも。おもひえたるまゝをつたへられ。猶三十六人集。六帖。その外物かたりは。土佐日記。うつほ。源氏。枕草子。かけろふ。さころも。さらしななとにとれり。又古事記。日本紀。古語拾遺。遊仙窟等をもてこれを補へり。」

とある。筆者が調査したところによれば雅言の中に出典例を明記しているのは全部で二一八例。その中の四〇パーセントは源氏物語で八八例、次に日本紀・二七例。以下、万葉集一八例、古今集一八例、後撰集と拾遺集がそれぞれ九例である。以上の計が二一八例中の七七パーセントになっている。約二十六種の書名があがっている。

○附記

本書の著者が富士谷御杖（初名成寿・成元・文化八年御杖と改名。通称専右衛門、号北辺。――国語学辞典・七九四ペ）であるとすれば、当然、「あゆひ抄」「かざし抄」等の関係で、語学的配慮が少しでもうかがえると思ったが、これは、初学者を対象とした書であるためか、語学的な用語や、語法的な説明は、ほとんど見られない。次の例などは、ややそれに当たるものであろうか。

○おほむね（一オ）

「さきにわか父わか兄。此国のことはをあきらめて。くはしくときおけるふみとも多く。世にもさやうの書数しらすあれと。後略……」

○おほむね（一オ）

「父兄。つねに。詞よりおこれる歌をはふかくいやしめるより。いにしへ今。詞はたかへとも。心はかはらぬよしをかたらるる後略……」

○七十六ウ

「2260サテモ　さも・も・アユヒ也」「2261サテモ〳〵　も同上」

○おほむね（三ウ）

「形容又は諺をもてもあてられたる所少からねと。……後略」

（右の「形容」なる語は、現在「比喩」という語にあたるのであろう。――筆者）

○三十四ウ

「1008タシナミブカイ　○よういふかきこゝろにくきコレハ体外ヨリイフコトバナリよういふかしハ内ニイフベシ」